

ラツーシュ編『アンドレ・ド・シェニエ全集』：一 八一九年の「解説」について

永田，英一

<https://doi.org/10.15017/2332802>

出版情報：文學研究. 64, pp.85-122, 1967-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ラツ・シュー編『アンドレ・ド・シェニエ全集』

— 一八一九年の「解説」について —

永 田 英 一

アンドレ・シェニエの特異な文学的評価の歴史を考える時、われわれは、一八一九年八月、アンリ・ド・ラツ・シューがみづから「解説」を附して編集刊行した『アンドレ・ド・シェニエ全集』*に関心を持たざるをえない。詩人はすでに二十五年前に恐怖政治の犠牲になって地上に存在しなかったが、これはその最初の作品集であるばかりか、ここからはじまるシェニエの文学的運命と、同時にその批評的、歴史的研究の基点をなすものである。(写真タイトル・ページ参照)

* *Oeuvres complètes d'André de Chénier* (publiées par H. de Latouche). — Paris, Baudouin frères, Foulon et compagnie, 1819. In-8°, XXIII—392 p.—B. N., Rés. p. Ye. 1132.

私は一九五八年十月からの一年半の滞仏中、この初版本を求めてあらゆる努力をしたが空しく終わった。私が書店で見出したもつとも古い版は一八二二年刊行のものであったが、非売品として入手することができなかった。そして結局私の所有に帰したものは一八四〇年のシャルパンティエ版*であつたが、この版ではすでに(一八三三年の改訂により)編者の「解説」は初版のものではない。

* *Poésies de André Chénier*, précédées d'une notice par M. H. de Latouche, suivies de notes et jugemens extraits des ouvrages de MM. de Chateaubriand, Le Brun, Jules Lefèvre, Villemain, Victor Hugo, etc. — Paris, Charpentier, 1840. In-8°, XLV—310 p., portr.—B. N., Ye. 18320.

一九六二年夏、私はルソー生誕二五〇周年記念の国際学会、ならびに第十五回国際フランス研究協会の大会に出席するため再び渡仏したが、この機会にパリ国立図書館での調査の計画を若干もっていた。シェニエに関するものもその一つである。

この年七月三十日（月曜）——前々日、最後の学会出席をおえた私は、国立図書館へ直行した。そしてまづ着手したのが、この「一八一九年版」に取組むことだった。私はその保存室で係員から手渡されたこの書を前にして、しばし嘆息し、ついでラッシーシュの解説「アンドレ・シェニエの生涯と作品について」^{*}の筆写にとりかかった。私の関心の中心は、何よりも、一八一九年というフランス文学史上きわめて重要なエポックに、現実にアンドレ・シェニエがどのように紹介されたかということだったのだ。——左にまづその「解説」の全文を訳出しよう。

* *Sur la vie et les ouvrages d'André Chénier.*

アンドレ・シェニエの生涯と作品について

わたしが初めてその作品を公にする作家は、ミューズを愛する若干の人々の記憶の中に、名声を約束された一つの名と、そして資格よりも哀惜にもとづいた一つの名譽を残していたにすぎなかった。かれの才能はエレジー風の若干の断片によってしか証明されてはいなかった。けれどもかれの詩文はかくも優雅にみちており、また古代精神

の香気にあふれていたもので、わたしの手にかれの他の試作品をゆだねた事情がなければ、具眼の士の追憶とこれらの詩文を知って味われた愉悅の伝達とで、かれのためには、諸版を重ねる榮譽にとつて代るべきものと思われた。

おそらく、同時に無名にして有名なこの詩人には、その運命の魅力を残しておくべきであつたであろう。おそらく無辜と神秘の伝聞をつつむヴェールを持ちあげることに、何か不敬虔なものがあるであろう。何故にこのミューズの未成熟な果実をあえてわれわれの関心の偶然にゆだね、そして人々の批判に、かれらが容易に承認すべくもないものを重ねて要求しようというのか。わたしはこのような考慮に従つたでもあろう。もしそうした考えがただ偉大な名声のために生れついていない人々に当然のものであるが故に、これに影響される恐れがなかつたならば、また安易な自己放棄によつて、いかなる犠牲をも要しないあの名誉への無関心に譲歩する恐れがなかつたならば。

この集を世に出すにあつて、わたしの熱烈な希望が向けられているのは、特に詩人たちにたいしてである。これを読むことによつて有益な研究と思索の材料を提供されるのは、見捨てられた一つの信仰に依然として忠実なごく少数の人々である。この世紀の実利的な思想は書巻に事欠かない。いまだ想像のあらゆる領野を放擲しなかつた人々のために、何故に一卷の書物も現われないのであろうか。こうした人々の評価は、批評から受けねばならぬ無関心からシェニエを慰めることができるかも知れない。そしてわたしがかれの作品と生涯について、かくもすばやい瞥見をなげようというのは、そうした希望においてなのだ。

アンドレ・マリ・ド・シェニエは、一七六二年十月二十九日、コンスタンチノーブルに生れた。母はギリシヤ人で、その才智と美貌は有名であつた。かれはフランスの総領事ルイ・ド・シェニエの三男であつた。四人兄弟の末弟は『フェヌロン』や『シャルル九世』や『ティベリウス』の作者、マリ・ジョゼフである。

幼少の頃、フランスへつれて来られたアンドレ・シェニエは、カルカツソヌへ送られ、九歳まで父の妹、叔母

の手許にあづけられた。かれはラングドックの空の下、なつかしい思い出もつきぬオード川の岸辺で、完全に自由な、夢見がちな教育をはじめた。一七七三年頃、父はパリへ帰った。そして二人の兄とともに、かれをコレージュ・ド・ナヴァールに入れた。かれの詩にたいする趣味は非常に早くから発達した。かれは十六歳でギリシャ語を身につけ、コレージュでサッフォーのオードを訳した。そしてこの一篇は日の目をみるに値しないまでも、すでに非常に独創的な才能の特質を示している。

二十歳で、かれは少尉としてストラスブルに駐屯していたアングーモワの連隊に入った。そしてそこで榮譽をもとめたのだが、この閑な生活に、またこの時代の将校たちの軽薄な風習の中に、かれの性格に合わない倦怠と嫌悪をしか見出さなかつたので、かれは六カ月後にパリへ帰つて、また実り多い勉学をはじめた。というのは、妨げるものもなく、教師もなく勉強をつづけたのだ。

かれは芸術、学問、文学界のあらゆる秀れた才能との交わりをもとめた。この時期から、かれはラヴォワジエ、パリッソー、ダヴィッドやルブランの名誉ある友情をえた。かれは勉学の情熱にかられて、夜明け前に起き出て、仕事に没頭した。かれの抱いた野心の唯一の夢は、人間智識の総体に到達することであつた。

過度の勉強のために、かれは激しい病氣にかかつた。幼友達のトリュデーヌ兄弟は、かれの回復を早めた後、スイスへ同行するように決心させた。二十二歳の時、かれはこの旅行をした。通りすがりの印象の若干のノートが発見されたが、作品を書くという考えに結びつくものは何もない。それどころか、そこにはあまりに昂奮した讃嘆の困惑と、そして創作するためには回想の魔術を必要とするあの感激の空しささえ感じられる。

まったく詩的なこの旅から帰ると、駐英大使のリュゼルヌ侯爵がかれと一緒につれて行つた。かれはロンドンで苦しい日々を過したらしい。自己の運命と従属の身分にあきたらず、執拗に憑きまどつた病氣に早くも悩まされ、

かれは頻繁な旅行のうちに、不安な、一所不住の幾年かを過した。そしてついに一七八八年やつとパリに落着いたのだった。

時に二十六歳、かれは手がけていた研究と書こうと思っていた作品のプランに、堅実な統一と秩序をおいた。ギリシヤ人に魅せられて、かれは自己のスタイルをかれらの神聖なモデルによつて形成した。けれども若干の人々があくまでミューズの飛翔を自分たちの狭い思想の枠に閉じこめようとする頑固さに驚いて、かれはそうしたものから免がれ、新しい道をころみようと決心した。そしてこの計画を「発明」と題された長詩において確立した。自然への愛、また人々が黄金の使用を知らなかつたあの素朴な時代の徳への愛は、かれの想念をエグロークへ向けた。これは純粹な魂の天与の傾向なのだ。チャタートンの運命は、われわれの詩人のそれと多くの類似点を示しているが、かれもまたこの様式に精進した。この種の作品は、われわれの間では、ロンサルやフォントネルやその他若干の人々の名のために不評を買っていたのは無理もないが、しかしシェニエは巨匠たちの足跡をもとめて、時にはそれを見出したのだ。

ポエジーとの親和にみちたある感情が、この心の靈感をとらえた。かれはこの感情を描くために、古代の諸形式の忘れられた優雅のすべてを再び見出した。詩人の生命を圧しつぶし、かつ支えるアムールよ、おそらく何人もこれ以上の能弁をもつて汝を表現すべく運命づけられたものはなかつたであろう。一つの絆によつて苦悩に、そして他の多くの絆によつて快樂につながるこの感情、それがかれの豎琴の上で痛切な真実のしらべを奏するのだ。

こうした感興のさなかにあつて、かれは幾つかの詩篇の根本思想を書きつけたが、そのプランは決して確定したものではなかつた。「ヘルメス」というあいまいな題で、かれはわが近代の智識の助けをかりて、ルクレティウス

のように「事物の本性」を解明しようと欲した。かれは弱さと純潔をその主人公とするために「アメリカ」を歌い、フランスの風俗の中にかくも深い、かくも入念な「愛の道」を描き直し、さては「シュザンヌ」という長詩において、聖書物語のすべての詩味とヤコブの素朴な魅力をとらえようと欲していたのだ。

かれはこうした野望の秘密をごく少数の人々にしか打明けなかつた。かれの弟、ルブラン、ド・パンジュ氏とブラゼー氏が、かれの貴紳会のほとんどすべてであつた。誰しも売名のはかない機会をもとめるものだが、かれはこれを避けて、沈黙のうちに自己の才能を熟させていた。そしてかれの当然の資格に先立つ名声の閃光を軽蔑していたのだ。

かれは孜々として労作に没頭していた。とその時、圧倒的な諸事件がかれをこの道から奪いにやつてきた。一七八九年がフランスのために輝いたのだ。勇敢な人々の心臓は希望に高鳴つた。そしてアンドレ・シェニエのそれもまた、祖国の利害問題の沸騰している時に、平然と文学の側に留まることができなかつた。自由を愛さなかつたならば、かれは詩文学に値したであらうか。

かれは自由に支持をあたえた。ミューズの妙なる言葉をすてて、論争の性急な論理をとつた。そして世に闡明されることを欲していた大義名分のために、最愛の無名を犠牲にした。かれは若干の有能な作家たち、なかでも友人ド・パンジュとルーシェに協力して、「ジュールナル・ド・パリ」によつて、諸方に進展していた無政府主義的原理と貴族の抵抗運動にたいする精力的な論陣を張つた。それはかれの頭上にかれ自身を呑みこむべきあの嵐をまき起すことであつた。

一般に、シェニエ兄弟は政治上に相反した思想を抱懐し、われわれの革命の間中、それを表明したといわれた。いまはこの誤りを訂正する機会である。かれらの見解の相異はただ一点においてしか生じなかつた。それはなるほ

ど肝要な一点なのだが、かれらの性格の相違ということだけで説明されるものだ。

「憲法の友ら」が、まづは立派なこの名の下に、かれらのクラブを設立した時、マリ・ジョゼフはこれに参加することに同意した。より賢明で、年上の（このことはしばしば忘れられているが）兄は、この結社がいかなる忌わしい影響を及ぼそうとしているか、また光榮ある大義に、おそらく取返しつかない、いかなる害悪をなそうとしているかを予感したので。かれは勇敢な文書によつてその残酷な教義と権力に闘つた最初の一人であつた。マリ・ジョゼフは、この集会の中に熱心な味方、おそらくは政壇や劇場におけるかれの努力にたいする若干の賞讃者や支持者を見出していたので、かれらの邪悪な意図をしばし信じようとはしなかつた。かれは新聞紙上で、兄の書きものには自分の思想は含まれていないと公表した。だが、その後まもなく、かれはこの「ジャコバン」という名であまりに有名になつた結社から、恐れおののいて遠ざかつたのだ。

かれの誤りは短かつた。というのは、それはかれの僚友たちの最初の行過ぎより前に消滅してしまつたからだ。けれども人々の心に印象づけるには、それで十分であつた。一点において意見のわかれた二人の兄弟は、すべての点でもそうであつたと決められたのだ。そしてそこから、アンドレ・シェニエは特権と不正義の側に属していったのだというあの説が生れ、これがいまだに繰返されている。こうした人物の獲得が、ある種の党派の野心をそそつたことは驚くにあたらないが、しかしそこでも、他の場合と同様に、その主張は明白な事実の前に消えうせるのだ。

卓越した理性と、そして道義心の一般化したフランスにおいても稀有な、あの市民的勇氣に恵まれたアンドレ・シェニエは、野心も、恐怖も、個人的利害も近づきがたい極めて少数の人々の列に加わらねばならなかつた。大部分の人には、いかなる党派にも、いかなる派閥にも属さずして、ただ一人で考えるなどということは理解できないで

あろう。それが自由の友の本領なのだ。こうした人々は相たたかう徒党結社の中間に身をおく。そしてかれらがこの線を進み、またあらゆる道の中でもっとも危険なこの道に身をさらすとしても、かれらはその不利益を知らないのだと信じてはならない。われわれは、かれらの勇気を讃えないまでも、かれらの巧妙さを決して非難しないでおこう。

アンドレ・シェニエの性格は、一切の偽善と一切の専制にたいして固くよろわれていた。かれは、自分でもいったように、封建的不正義に劣らず民主的狂気をも認めなかった。赤い踵の盗賊も槍をもった盗賊も、バステイーユの横暴も愛国者のそれも、また市場の女たちの特権も宮廷の女たちのそれも許さなかった。コブレンツかジャコバンか、いづれかを選ぶとなれば、かれは恥辱を感じたであろう。奪われたあの生命にかけて、ルイ十六世の弁護に身を挺するシェニエが見られるであろう。そして偉大な不幸の立場が神聖なものに思われた時、かれが代筆したその筆は、すでに、王権が民衆の正しい自由に対向させようと欲するであろう、あの抵抗にたいして史上もっとも強烈な文言を書きつけていたのであった。

けれども、事変は急速に進展していた。シェニエは叛徒の憎悪を買っていたのだ。かれはシャルロット・コルデーを称讚し、コロ・デルボワを批難し、ロベスピエールを攻撃したのだった。そこへルイ十六世の裁判が強力な敵どもの復讐心をかき立てにやってきたのだ。かれは、時の新聞紙上で、この裁判の手續を変えさせるために、勇気ある人々の理性の持ちうるすべての力をつくした後に、マルゼルブ氏に国王の身辺でもかれの危険な仕事を分担してくれるように申し出た。そして死刑の判決が下されると、かれの猷身は倍加されるように思われた。

周知のように、国王は冷静と威厳にみちた書簡によって、自己を断罪した判決にたいして人民に訴える権利を議会に要求したのだった。この書簡は一月十七日から十八日への夜に署名されたもので、アンドレ・シェニエの作で

ある。それは、かれ自身の手で書かれ、マルゼルブ氏の意見によつて数個所訂正された原文にもとづいて、この集の中に印刷されている。

かくも多くの大胆不敵な行爲は、シェニエの生命を危険にさらしていたのだ。かれは一七九三年頃パリを離れるように説得された。かれはまづルアンへ行つた。ついでマリ・ジョゼフが民衆の人気をあつめていたヴェルサイユへ。二人の兄弟の友愛は絶え間ない相互の証言によつて保たれていたのだ。わたしはここに『アンリ八世』の作者の一通の手紙を発表するが、そこにはずっと古くからの、もつとも忠実な愛情が描かれている。ジョゼフが自作の悲劇『ブルルスとカシウス』を献じたのはこの兄にある。アンドレ自身もまた、バークの侮辱的な広告にたいして弟を擁護する。かれはマリ・ジョゼフにオードの第一作をささげ、また好んで自分の作品の中にかれらの相互援助の記憶をよび起している。

ヴェルサイユでは、弟が自分の勢力でかれを保護し、みづから家屋を選んでかれの避難所とした。そしてそこで、この人里はなれた壁の中で、悲哀と平穩の日々に身をまかせつつ、われわれの詩人は、もつとも歎かわしい、またもつとも不測な出来事さえなければ、フランスのために失われることはなかつたであろう。

アンドレは、かれの友人のひとり、バストレ氏がパッシーで逮捕されたことを知つた。かれはそこへ飛んでゆく。その家族に慰めの言葉をかけようとする。書類捜査掛の委員たちは、この住居の中で見つかつた人々を「容疑者」と断定した。そしてかれらをみんな牢獄へ連行したのだ。人々はどこかの委員会の令状とおぼしきものの出所をもとめた。いかなる権力からそれは発せられたのか、その権力を譲歩させるために、人々はそれを知ろうとした。これらの奔走は空しきかつた。ある人は拘禁者の保釈金として莫大な額を提供したが、いかなる権力もあえて自由をあたえようとはしなかつた。命令なくしてかれは逮捕されたのだ*。

* パッシーでシェニエが捕えられた家は、文学を愛し、これを立派に修めているある人の所有となつた。その人は、庭園の中に、この不幸な出来事のために記念の碑をたてた。(原註)

けれども、無政府主義的徒党に敵対する人々はすべて搜索され、革命裁判所の判決はパリを悲愁で覆っていた。拘禁者たちの唯一の命の綱は、かれらが多数であるために、忘れられるということだつた。あの時代に、牢獄の恐しい試練からのがれた人々は、友人たちの配慮がこの救済策に向けられていたことを記憶している。忘れられるか、死ぬかでなければならなかつたのだ。マリ・ジョゼフは、その頃、政壇で侮辱され、またかれの思想をおそれ、かれの才能をねたむロベスピエールの個人的憎悪の的になつていたので、刑を早める力しか持たなかつたであろう。かれは国民公会へ顔を出すことさえ控えていたので。兄を救うどころか、兄とともに死ぬかも知れなかつたのだ。

かれの意見に従っていたなら、よかつたのだ！ アンドレのためにも、ソーヴール・ド・シェニエ氏の命を守つたあの慎重さの中に身を潜めていたならば。次兄ルイ・ソーヴールもまたこの時コンシエルジュリーに拘禁されていたのであつた。

わたしは決して、兄の運命についてマリ・ジョゼフに責を負わせようとした下劣な中傷を反駁するために、こうした委細を説明するのではない。そうした弁明はかれの名誉を傷つけるであろう。かれの主張のもつとも烈しい反対者も、かれの才能のもつとも不埒な非難者も、かれと闘う光栄をもつた時、こういう卑劣な推測には決して加担しなかつたのだ。たしかに、シャトールブリアン氏にあつては、シェニエを愛する理由は少しも見当らない。アカデミーにおけるこの後任者はおそらく、有名な演説の中で、かれにたいするあまりに多くの怨恨を想い起したであらう。

う。だがこの演説の中で、かれはつけ加える。「シェニエは、わたしと同様に、最愛の肉親を失うことがどういうことであるかを知った。わたしがその兄にささげる尊敬に、かれも心を動かされるだろう。というのは、生来かれは寛容な人であつたからだ。」兄の友達が、終生、弟の友人であつたことは知られている。そしてシェニエの母は、と尊敬すべきドーヌー氏が、かくも非命に倒れた犠牲者について語りながら、いつている。十四年間その死を泣いた母は、生ある限り、マリ・ジョゼフと一緒に暮らしたのだ。母を慰めたのはジョゼフであつた。

けれども二人の詩人の父は、余計な訴えで、この血醒い時代の権力者たちを悩ませていたのだ。軽率な老人だ！かれはついに話を聞いてもらうことに成功した。「何ですつて！と、その人はまだ生きているので名前をあげないが、あの恐怖政治の首謀者の一人がいつた。六カ月以来まだかれが告訴されていないのは、かれがシェニエの名を持つているためでしょうか。代議員の兄弟であるためでしょうか。さあ、お帰りなさい。あなたの息子さんは三日後に出るでしょう。」

ああ！果せるかな。そしてあわれな父親が息子の友人たちに、その希望と喜びを語りに行った時、人々はこう答えたものだ。どうか、あなたの愛情を決してあらわさないで下さい！

アンドレ・シェニエは、獄中で、作品に手を加えた。そしておそらく弟がそれを出版したのであろうが、原稿がいろいろな人の手や場所に散逸したので、かれの始めたこの仕事は未完に終つてしまった。

これらの作品は、結局かれ自身の手でまとめられ、全部整理されて、二十三年の忘却の後に、わたしに託されたのだが、その時の感動がいかなるものであつたか、あえていえるだろうか。この貴重な委託物を引受けて、わたしはいかに思いを凝らして、おそらく不滅なる思想の、このもろい痕跡をながめたことか。わたしは最愛の手で書かれたもののあたえる感動に似た何かをもつて、またわれわれの心にもつとも近しい感情をもつて、これらの歌を反

読した。ひそかに綴られたこれらの文字の幾つか、また獄吏の穿鑿をのがれるために選ばれた細長い用紙にぎつしり書きこまれたこれらの文章が、わたしに何と多くの悲痛な思いをよび起したのか！ 歳月がこれらを侵蝕しはじめていた。そしてわたしは、かつてナポリでエピクロスやアナクレオンの写本が繰りひろげられるのを見たことがあつたが、それとほとんど同じ慎重さで、これらをひろげるのだった。自然の変遷があつたすばらしい古代のモデルをほとんど台なしにしてしまつていたが、さらに恐ろしいわれわれの不和確執もまた、その輝しい弟子のひとりをも久しく脅かしていったのだ。

けれども、この若き詩人はかれの草稿に決して満足してはいなかつた。時としてあいまいな思想の意味、あまりに省略的な表現、批評の指摘しそうな用語、かれはこうしたものをみづから注意していた。かれはしばしば自分を責めていた。そしてわたしはかれが自分の手で下線を引いたり、あるいは厳しく批評していた章句を見出した。われわれの批判者のうち、正確さをもつて第一等の価値とし、作品の美点に感動するよりもその欠点に怒る人々は、この「集」の中にもかれらの非難をあびせるべきものを見出すであらう。この「集」はわたしが尊重しなければならなかつた利害問題がなければ、これほど大きなものにはならなかつたのだ。けれども、おのれの愉悦にたいして警戒心の強いこれらの人々にしても、おそらくこの作者が人生行路の、動揺と情熱の時期しか生きなかつたことを想起するであらう。もし諸君がかれに一点非の打ちどころのない正確さを望むならば、三十一歳にしてかれの上に閉じられた墓へいつて、かれを呼戻し給え。嵐に打たれて落ちた、生れたばかりの果実に、かれらは秋の風味を求めるのであらうか。

かれの詩歌の全体はふしぎな魅力をあたえる。それは天才の作品の特質なるものを持つてゐる。諸君を諸君自身の思念から奪い、そしてかれの創造の世界へ運び去る力だ。わたしはもつとも氣むづかしい、また、反省によつて、

思想の効果を計量することにもつとも慣れた人々でさえ、この熱狂的な感激を同じくするのを見た。かれの牧歌の大部分は、テオクリトスもその排列を是認するようなモデルであり、かれのエレジーはティブルスがその炎を投じ、ラ・フォンテーヌがその優雅を交えた靈感のように思われた。

ところで、わたしは、かれの名を後世に伝えるべき事物について語りながら、まだ囚われの身のかれに幾日かが残されており、従つてつらい役目を果さねばならぬことを忘れていた。トリュデーヌ兄弟もまた拘禁生活を共にしていた。シュヴェーは、かれらと同じく囚われていて、シェニエの肖像画の制作に従事していた。この画は、今日ヴェラック氏の所蔵になっているが、かれの現存する唯一の肖像である。かれがコワニー嬢のためにオード「囚われの乙女」を作ったのも、サン・ラザールであるが、これはおそらく感動なしに読まれたことは決してないであろう。かれが裁かれた日の前日、父はなおも、かれの才能と勇氣について語りながら、かれを安心させていた。「ああ！ と父はいつた。マルゼルブ氏もまた勇氣を持っていた！」

かれは法廷に出たが、あえて語ろうとせず、また自己弁護もしなかつた。「人民の敵」と宣告され、「自由に反対して」書き、「専制」を擁護した科で有罪と認められた上、かれはさらに脱走するために「陰謀を企てた」という奇妙な罪科を背負わされた。判決は熱月七日（一七九四年七月二十五日）に執行されるものとして下された。すなわち、かれの鎖をたち切り、全フランスを解放するであろうあの日の前々日なのだ。

トリュデーヌ兄弟は、かれと一緒に死にたいと懇願した。けれどもかれは翌日の執行に予定されていたのだ。（翌日の、熱月八日だ！）かくて犠牲者はみづからの血を流そうとするその場所に、友人の血を認めることができず。その時、死刑執行人たちは拍手喝采するのだった。

シェニエは午前八時に罪人押送車に乗った。友情がもつとも強く求められるこの瞬間、まさに鼓動をやめんとす

る心臓、その胸のうちを吐露したい欲求にかられるこの瞬間に、不幸な青年は、なんら愛情をうけることなく、また表現する術もなく、すべてをあとにした。おそらくかれは空しい絶望をもって蒼白な死の同伴者たちを眺めていたであろう。誰ひとり知っている人はいなかったのだ！ 同行する三十八人の犠牲者の中には、わづかにモンタランペール氏とクレキ・ド・モンランシー氏の名、トランク男爵と、そして息子の身代りになつて喜んで死のうとする、あの健気なロワズロールの名を知っているにすぎなかった。だがこれらの人々は誰もかれの心の内奥を知るよしもなかった。かれの思想を理解したあの魂、詩人もいつたように、かれの心の血縁なるあの心、それをシェニエは切なく呼びもとめて、身をふるわせていたであろう。……とその時、突然、六カ月以来閉されていた監房の扉がひらく。そして運命の車の第一列に、かれの傍らに、かれの友人、好敵手、「月々」の作者、あの輝しくも不運なルーシェが坐らされる。

何と多くの憾みをかれらは互いに述べたことであろう！ 「まったく、とシェニエはいつた。わが市民の中でももつとも立派な市民、最愛の父であり、夫であるあなた、そのあなたを犠牲にするなんて！ ——あなたこそ、とルーシェは答えた。高潔な青年、あなた、天才と希望に輝くあなたを死に追いやるなんて！ ——ぼくは後世のために何もしなかつた、とシェニエはいつた。そしてわれとわが額を叩きながら、だが、ぼくはここに何かを持っているのだ！」 とつけ加える声が聞かれた。『ルネ』と『アタラ』の作者はいう。「これは死の瞬間にミュージズが、かれにかれの才能を啓示したのだ。フランスが前世紀の末に、三人のすばらしい才能をその黎明において失つたことは、驚くべきことだ。マルフィライトル、ジルペールそしてアンドレ・シェニエだ。最初の二人は困窮のはて死に、三人目は断頭台に消えたのだ。」

その間にも、押送車は進んでいった。そしておのれの悲惨のために狂暴になつた民衆の波を通して、かれらの眼

はある友人の眼に出会った。友人はかれらの死の行進に最後まで同道した。あたかも最後のつとめを果すかのよう
に。そしてしばしば不幸な父にかれらの最期の悲しい委細を物語ったのだが、その父もまた息子の死後、六カ月し
か生きのびなかつたのだ。

かれらは最後の瞬間にも詩を語った。かれらにとつて、それは友情について地上でもっとも美しいものであつ
た。ラシーヌがかれらの対話と最後の賞讃の的になつた。かれらはラシーヌの詩を朗誦しようとした。それはおそ
らくかれらの勇氣と無罪を侮辱するこの群衆の叫喚を封じるためであつただろう。かれらの選んだ詩句は何であつ
たか。わたしはある人にこの質問をしたが、その人は返答をためらつた。老齡と不幸のために記憶力が衰えはじめ
ていたので。かれはこの記憶をさぐり、かつて自分がそのことを話したかも知れない幾人かの人々に訊ねてみると
約束した。わたしは苦しい思いで待ちつづけた。そしてついに数日後、わたしとはおよそ縁遠い一種の無関心な調
子でこういつたものだ。それは『アンドロマック』の第一場だつたと。

かくて、交る交る、かれらにはあの崇高な悲劇の幕をひらく対話を朗誦した。このことを最初に思いついたシェニ
エからはじめた。そしてこの美しい詩句を吟じた時、おそらく最後の微笑がかれの唇をかすめたであらう。

Oui, puisque je retrouve un ami si fidèle,
Ma fortune va prendre une face nouvelle ;
Et déjà son courroux semble s'être adouci,
Depuis qu'elle a pris soin de nous rejoindre ici.

「そうだ、かくも忠実な友に再び逢うからには、わたしの運命はまさに新しい様相を呈しようとして
いるのだ。そしてすでに、われらをここに結合させてくれてから、その怒りは和らいだようだ。」

この感慨はかれの胸中にあつた。かれの仆れた時代がそれを説明している。かれは未来を悲しんだであらうか。フランスにおいて、かれは徳義と自由の立場に絶望していたのであつた。

かくてこの若き白鳥は、革命の血醒い手で締め殺されて、非命の最期をとげた。真理と祖国とミューズのみを崇敬したことに満足して、かれは刑に赴きながら、自己の運命に欣然としていたといわれる。わたしもそれを信じる。若くして死ぬことは何と美しいことか！ 敵どもに汚れなき犠牲をささげ、そしてわれらを裁く神に、いまだ幻想にみちた生命を返すことは、何とすばらしいことか！

一八一九年八月十四日、パリにて

H・ド・ラトゥーシュ

*

八月一日(水曜)――私はこの「解説」の筆写を完了し、ついでこの書の目次を写しおえると、閉館をつげる鐘の音をあとに、テュイルリーへ足を運んだ。そしてその道路わきの小公園まで来ると、私はベンチに腰をおろして一息ついた。午後六時だというのに、まだ陽は高く、空には明るい光がみちていた。地には色とりどりの草花。眼の前にはカルーゼル凱旋門、その向うにオペリスクの立つコンコルド広場、――ああ、かつて血塗られた革命広場だ。……私はアルフレッド・ド・ヴィニー描くところのあの『ステロ』の「夏の夕」の情景を想いみた。自由の女神像、ギョブリーヌ断頭台、そのまわりに蝟集する群衆、私はその叫喚を聞くようにさえ思った。そしていつしか「解説」の末尾の數行を口ずさむのだつた。

“Ainsi périt ce jeune cygne, étouffé par la main sanglante des révolutions…… Il est si beau de mourir jeune ! Il est si beau d’offrir à ses ennemis une victime sans tache, et de rendre au Dieu qui nous juge une vie encore pleine d’illusions !”

*

さて、われわれはこのアンドレ・シェニエの最初の紹介者、ラツィッシュの手法に注目しなければならない。

「解説」は、見られる通り、非運の青年詩人アンドレの擁護と頌讚に終始している。しかもその内容は劇的起伏にともみ、そのスタイルは敬虔、悲愴、かつ感傷的で、いわばロマンティックな調子をおびていて、さながら一篇のドラマを讀む感をあたえる。――

一七八九年の革命が勃発すると、この「無名にして有名な詩人」の運命に、突如、転換が起つた。かれは祖国の危機に際会して、かねて抱いていた古代的市民・詩人の觀念に目ざめ、あえて革命ジャーナリズムの渦中に身を投じた。「自由を愛さなかつたならば、かれは詩文学に値したであらうか。」

けれども、その闘争の過程において、かれは最愛の弟ジョゼフと意見を異にした。だが、それは単に「性格の相違」によるもので、かれは決して特権と不正の味方ではなく、これら兄弟の友愛は「絶間ない相互の証言」によつて保たれていたのだ。

かれは徒党結社の相たたかう中に、自主独往、ただ一人で思考し、行動した。一切の偽善と専横を憎んで、時の

権力者たちに無謀な挑戦をつづけ、さては国王の弁護に挺身する。……………

だが、アンドレはついに逮捕された。友人の不幸を見舞にゆき、誤つて、不法に捕えられたのだ。直ちにサン・ラザール獄へ。

革命は悲劇的段階に達していた。恐怖政治の真つただ中、拘禁者たちは絶対絶命の運命にあつて、「唯一の命の綱は、……………忘れられること。」そうだ、「忘れられるか、死ぬかでなければならなかった」のだ。

そこへ「軽率な老人」がいた。四人の息子たちの中でも、サン・タンドレをもつとも愛した父ルイ・シェニエだ。恐怖政治の首謀者の一人(バレール・ド・ヴァイユルザック)はいつた。「あなたの息子さんは、三日後に出るでしょう。」老人は希望に甦つた。だが「ああ、果せるかな。」

シェニエは「人民の敵」として断罪された。処刑は熱月七日——判決の当日だ。「一緒に死にたい」と願つたトリュデーヌ兄弟は、その翌日だ。——周知のように、熱月九日には、ロベスピエールが失脚して恐怖政治に終止符が打たれるのだつた。

シェニエは罪人押送車に乗つた。かれは「空しい絶望をもつて蒼白な死の同伴者たちを眺め」、かれの「心の血縁」をもとめる。……………とその時、詩人ジャン・アントワーヌ・ルーシェがかれの側に坐らされる。二人の会話。シェニエは額を叩きながら、つけ加えた。「だが、ぼくはここに何かを持っていたのだ！」

最期の瞬間にも、かれらは詩を忘れなかつた。それは友情について地上でもつとも美しいものだ。そしてかれらはラシーヌを賞讃し、悲劇『アンドロマック』の美しい詩句を吟じつつ、昂然、かつ従容として死に赴く。

かくて「若き白鳥」は、暴虐な革命の手で血祭りにあげられたのだ。だが「若くして死ぬことは、何と美しいことか！」

これは、疑いもなく、一篇のロマン劇の筋書である。そして「解説」の全文には主人公にたいする同情と愛惜の念がこめられている。とりわけ、その作品に襲いかかるであろう旧派の人々の非難を予見して、あらかじめ擁護に懸命なのは注目に値する。「もし諸君がかれに一点非の打ちどころのない正確さ (Correction) を望むならば、三十一歳にしてかれの上に閉じられた墓へいって、かれを呼戻し給え。嵐に打たれて落ちた、生れたばかりの果実に、かれらは秋の風味を求めるのであろうか。」

*

一八一九年八月、この「解説」を附して『アンドレ・ド・シェニエ全集』は公刊された。そして当代の人々の間にたちまち大きな反響をよんだ。――

世は「王政復古」を迎えて、人心はようやく落着きを取戻したが、まだ革命の記憶は生々しく、人々は今更のようにあの時代の悪夢をかえりみて、その犠牲者にたいする同情と悲憤の涙を禁じえなかった。そしてにわかにこれら非業の死をとげた人々の栄光を讃えるようになり、かつての売国奴「市民カペー」は悲劇の王として称揚され、寡婦「寡婦カペー」は殉教の王妃として讃美される有様だったが、――かの時、一人の天才詩人がいて、詩業半ばに、自由と正義のために闘い、断頭台の露と消えたのだった。

また文学界では、この世紀とともに出現したシャトーブリアン以来、新しいものを求めてやまぬ気運が高まっていた。そしてこの年、バイロンが翻訳され、ユゴー兄弟は『ルネ』の作者の影響の下に「コンセルヴァトゥール・リテラル」を発刊し、また翌年三月にはラマルティエヌの『瞑想詩集』が出るといふエポックで、あたかもロマンティスム

の勃興期であった。

果して、この「若き白鳥」とその歌には、翕然として強い人間的同情と文学的関心があつまつた。そして新旧両世代の間にゴウゴウたる論議、いわゆる「一八一九年の批評」をまき起したのだ。

十七歳のヴィクトル・ユゴーは、早くも「コンセルヴァトゥール・リテレル」の創刊号に(同十二年)に、この『全集』をとりあげていう。

「一卷の詩集が出た。作者は死んでいるのに批評は雨と降る。……それは生きている人を苦しめるとか、若い才能の芽をつむとか、将来あるものを葬るとかいうことではない。奇妙なことに、批評は椋に襲いかかっているのだ！ その理由は要するに、詩人はたしかに死んでいるが、生れたばかりの新しい詩であるからだ。」

そしてシェニエの作品にみられる不正確な語法や作詩法の無視、その他もろもろの欠陥についてもユゴーは懸命に弁護する。

「これらの欠点は大きい。だが、それは決して危険なものではない。おのれの名譽を享けなかつた人を正當に評價することが問題なのだ。まだ革命の斧がその未完の作品の中に血に染まつて置かれているというのに、誰があえてその欠陥を非難しよう。」

またユゴーは、この時、自分たちが「その遺産をうけついでた人」の「高貴で謙虚な性格」をほめ讃え、そして詩人の断篇をいくつか引用しつつ、特にそのエレジーについて断言する。

「あらゆる欠点にもかかわらず、アンドレ・ド・シェニエはわれわれの間では真実のエレジーの父、またモデルとみなされるだろう。われわれはこのことをあえて信じ、かつ公言して憚らないのだ。」

そして要するに、

「アンドレ・ド・シェニエについては、中間の意見はない。この書を投げすてるか、しばしば反読するかに決しなければならぬ。かれの詩文は批判さるべきでなく、感得さるべきものだ。それはより優秀と思われる他の多くの詩文よりも生残るだろう。実際、何かを含んでいるからだ。」

ユゴーは、また翌年、同じ雑誌(第十一号)にラマルティヌの『瞑想詩集』をとりあげた際にも、シェニエを想い起して、「わたしはこの韻文の中にアンドレ・ド・シェニエ的な何かをみた。……両者には、いづれも同じ獨創性、同じ思想の新鮮さ、斬新かつ真実なイマジユの華麗さがある」云々といっている。

「コンセルヴァトゥール・リテレル」は、その後、気鋭の青年たちの参加とともに次第に新しい方向を明確にしたが、三十号をもつて終刊とし、エミール・デシャンらの「ミューズ・フランセーズ」へ発展的解消をとげた。そしてこのロマン派の公的機関誌の創刊号(一八三三年七月)には、あの有名なシェニエの一句“*Sur des penses nouveaux faisons des vers antiques*”(新しい思想で古い詩を作ろう)というのがエピグラフとして掲げられたのである。

けれども、アンドレ・シェニエを新しい流派の「直接の先駆」または「長兄」として祭りあげることには、もつとも献身したのはサント・ブーヴである。サント・ブーヴはまづ『十六世紀フランス詩の概観』(一八二九年)において、シェニエに讃辞を呈し、「ヴィクトル・ユゴーはアンドレ・シェニエの継承者である」といい、ついで「マテラン・レーニエとアンドレ・シェニエ」(一八三〇年)においては「レーニエは一つのエポックを閉じ、シェニエはいま一つのエポックを開く」という。そして特に『ジョゼフ・ドロルムの生涯と詩と思想』(一八三〇年)においては、シェニエの擁護と顕彰に憂

身をやつしているとなんと思われ。

ジョゼフ・ドロームは「精神も心情も、あのアンドレ・シェニエが断頭台の下から十九世紀に遺贈した若き詩派に属して」いて、その「詩」においては、もし自分が「あの恐しい日々」に生きていたなら、

Que j'eusse alors, tout fier, porté comme au martyr,

Après Roland, Charlotte, et le poète André,

Ma tête radieuse à l'échafaud sacré!

(大意——従容として殉教者のごとく、ローラン、シャルロット、そして

詩人アンドレに続いて、聖なる断頭台にわが首級を差出したであらう！)

と叫ぶ。そして運命の神の手の中で、「いけにえ」の取替えが許されるならば、自分はアンドレの身代りにもなつたであらうとさえいう。またジョゼフの「思想」によれば、シャトーブリアンは流派を作らなかつたが、シェニエはそうではなく、自分たちはシェニエの「後継者」であつて、この新しい派の詩格は、ラシーヌやドリユのそれよりも、シェニエのものに「明らかに」似ているというのであつた。

こうしてサント・ブーヴは、この詩人の本質をよくもわきまえずに、無理にも当代の趣味で変形して、これを「ロマン軍」の旗印として押し立てたのであつた。

その他、ヴィニーやミュッセ等に明らかに看取されるシェニエの影響ないし暗示については、いまは詳しく述べない。要するに、アルセーヌ・ウーセもいうように「十九世紀のあらゆる詩人は……アンドレ・シェニエの黄金の船に乗つて、イオニア海を渡り、ホメロスやサッフォーの歌声（シレミア）を聞くために出帆した」*のである。

* Arsène Houssaye, *Histoire du 41e fauteuil de l'Académie française*, 1845.

けれども、アンドレ・シェニエがこうして若い世代に熱狂的に迎えられたということは、すなわち旧派の人々をして顔色なからしめたということだ。テオフィール・ゴージェエの言葉^{*}をかりれば「ラシーシュによって出版されたかれの詩文は真の啓示」であって、人々は「当時慣用の敘述的な、教訓的な詩風の無味乾燥さをすっかり感じた」のであった。つまり似非クラシックの「造花の花束」は、ために色褪せてしまったのである。

* Théophile Gautier, *les progrès de la poésie française depuis 1830* (1867)

これにたいして、当然のことながら、旧派の人々からの反撃が起った。そしてその烈しい非難や嘲罵はアンドレの「枢」に襲いかかるのだったが、これについては、パウール・ロルミアンのあの象徴的な一句^{*}が想い出される。

⁴“Nous, nous datons d'Homère, et vous d'André Chénier !”

(われわれの祖はホメロスだが、君らはアンドレ・シェニエではないか！)

* Baour-Lormian, *le classique et le romantique*, Paris, 1825.

なお、この句は「クラシック」にたいする「ロマンティック」の言葉で、原文では左の通りであるが、普通この形で引用される。

Notre empire est bien jeune ; on ne peut le nier ;

Car vous datez d'Homère et nous d'André Chénier.

(大意——たしかにわれらの帝国は若い。なぜなら、あなた方はホメロスから

出ているが、われらはアンドレ・シェニエからだ。

また私怨ともいうべき動機から、詩人そのものよりもその作品の刊行者に襲いかかるものもあった。そのもつとも代表的なのが、小唄作家のベランジェである。

ベランジェは当時「シャンソンのホメロス」として流行の頂点にあったが、アンドレの詩の星の出現によって急速に影がうすくなり、一八一九年の刊行者の仕打に我慢がならなかった。かれは詩人シェニエの存在を信じようとせず、その作品はすべてラツィシュの創作だと主張した。そしてあの悲愴な獄中の作「諷詩」についても「今日では誰でもこれらの詩文がラツィシュの作だということを知っている」といって、この点に関するかぎり、親友ラツィシュをも許そうとしなかった。かれは、終生、ラツィシュを「アンドレ・シェニエの巧妙な創作者」あるいは「偉大な贗物づくり」と思いこんでいたのである*。

* Cf. Béranger, *Ma Biographie*, Paris, 1858.

もちろん、新しい流派に組する批評家たちは全面的にラツィシュを支持し、その功績を賞揚した。――
アントワヌ・ド・ラツールは「ルヴェー・ド・パリ」(一八三四年)において、シェニエの作品について述べる前に、ラツィシュに話しかけている。

「アンドレ・シェニエの未完の詩篇を出版することによって、あなたはわれらの時代の栄光の一つであるところの、文学刷新の運動をはじめた最初の一人であります。フランスにおいて一切の詩文学が死滅したかと思われた時代に、あなたは、突如、悲劇的な死によって中断され、一つの未知の名によって署名された作品のバラバラの断片

を、同時代の人々に提供するという考えの前に躊躇なさらなかつた。成功は大きく、また全般的でした。……われらの感謝の念は、今後もながく、アンドレ・シェニエというこのすばらしい名をあなたの保護の下におくでしよう。*」

* Cité par Frédéric Segn. *H. de Latouche*, Paris, 1931, p. 105—106.

またジュール・ルフェーヴルは、一八一九年「アンドレ・シェニエの靈に献げる」詩において、「汝のほとんどすべての詩文の中にわが魂を見出した」のであつたが、同じ「ルヴェュー・ド・パリ」でラツシーシュの例の「解説」をとりあげ、その感覚と勇気を讃えている。

「皮肉にも、公安委員会と呼ばれた裁判所の、この光輝ある若き犠牲者について、かくも深く感得されたものも何も書かれたことがない。不拔の同情の確信をもつて、この古代的天才のあらゆる新鮮さを判別し、後世の批判を予見し、そして学院や講堂風の文学の面前に、あえてこれを宣明したことは何かである。……人々が世論によつて生きている時、これに正面から立向うことには、つねに何かの価値がある。というのは、これと衝突すれば、大てい、ひっくり返されるからだ。このことは銘記されねばならない。*」

* *Op. cit.*, p. 106.

サント・ブーヴにいたつては、前述の通りで、およそのことは察しられよう。かれは一八三九年二月「アンドレ・シェニエの未刊の資料」¹⁾について述べる前に、まづ「最初の刊行者に当然あたえらるべき名誉と感謝をささげよう」と呼びかけているが、さらに一八五一年三月ラツシーシュの死(同年二月二十七日)に際しても、新たにその業績を想い起して、尊敬と

感謝の言葉を繰返している。

「アンドレ・シェニエの詩作の出版はラッシーシュ氏の大きな肩書であり、また大きな文学的事件であつて、この事件には依然としてかれの名が結びつけられるであらう。……書類がかれに手渡された。そして、最初の一瞥で、かれは判断を下したが、これについてはどんなに感謝しても十分ではないであらうし、またそれは今日かれの第一等の名誉の称号である。かれは即座に、自分がかかわっているのは、前途有望な青年詩人ではなく、……すでに強力で、革新的で、大胆かつ純粹な、その過失においてまで純粹な、一人の巨匠であることを理解した。一言にしていえば、ラッシーシュ氏は、この時、獨創的な、勇氣ある鑑識眼を働かせたのであつて、これは市民社会における勇敢な行爲と同様に稀有な、いや、より一層稀有なことなのだ。」²⁾

そして、もしこの「崇敬すべき詩篇」が他の人の手に落ちていたなら、たとえば、当時のアカデミックな人々の手に落ちていたなら、どうなつていたであらうか。思えば慄然たらざるをえない。されば、

「これを直ちに感得し、詩人、兄弟としてこれを認識し、そして（若干の細かい点を除いては）かれが受けとつたままの姿でわれわれに返してくれたが故に、ラッシーシュ氏に榮譽あれ！」³⁾

1) Sainte-Beuve, *quelques documents inédits sur André Chénier* (*Portraits littéraires*, t. I)

2) 3) —, *M. de La Roche* (*Causeries du Lundi*, t. III)

なお、サント・ブーヴはその後ラッシーシュの編集方法については、かなり批判的になつた。

けれども、アンドレ・シェニエとその刊行者を肯定するにせよ、否定するにせよ、こうした論議は、要するに、その出版物の成功を意味するものにほかならない。アンリ・ド・ラッシーシュ編『アンドレ・ド・シェニエ全集』は、かくて

大成功を収めたのだ。そして一八二〇年、二二年、二四年、二六年……と版が重ねられ、ロマンティスムの上昇とともに、シェニエの死後の名誉と権威はますます高まつていった。先に引用したアントワーヌ・ド・ラツールの文章にも「全般的な大成功」について述べられていたが、編者ラツール自身も一八三三年の改訂版の「解説」で、このことを証言している。

「今日われわれは、かれの書の莫大な成功と、フランスの詩の将来にたいするまったく革新的な才能の影響を確認せざるをえない。今日われわれは、既刊の諸版に洩れた最小の断片までも公表することに躊躇しないであろう。われわれはこの近代派の首領の、いまや確立された権威について語らねばならないであろうが、これは情愛と学識の批評家サント・ブーヴが、すでに雄弁に特徴づけた純朴な天才である。」

ラツールは一八一九年「この義務を果すのに兄弟のような献身」を示したのであつた。そして「シェニエがその再生者である詩派の動き」に無関心たりえず、その進展を見守っていたのであつたが、かれはシェニエが賞揚されるのを聞いて「大きな喜び」を感じ、また「自分の教会の長のすばらしい説教の鐘を鳴らした教会理事のように」誇らしげであつた。「わたしに託されたこの出版の仕事は、わたしの文学上の最良の肩書になるだろう」とかれ自身もいっている。²⁾

1) *André Chénier. Poésies posthumes et inédites, nouvelle et seule édition complète* (publiée par H. de Latouche).

—Paris, Charpentier, 1833. 2 tomes en 1 vol. in-8°—B. N., Ye, 18316—18317.

なお、この「解説」では、初版のものにかなり大幅な加筆訂正がなされた。文章もあのロマンティックな調子からかなり抑制されたものになっている。特に詩人の遺稿についての新たな提言は、シェニエ研究家の間に物議をかもしたことを附記しておく。

2) Cf. H. de Latouche, *la Vallée aux Loups*, 1875, p. 99. (本書の初版は一八三三年刊)

けれども、その後ロマンティスムの熱もようやくさめ、この国の文学思想の推移変遷とともに、シェニエについての各種の錯覚が指摘されるようになった。より冷静に、より間近にこの詩人をみれば、これは本質的に十八世紀の子であり、そのポエティックは、ボワローやラシーヌのそれだけでなく、少くともクラシックのものであることが判明したのだ。

またこの『全集』に収められた詩篇のテクストについても、多くの疑念が持たれ、編者の誤認、曲解、さては意識的な改竄をさえ指摘されるようになった。特にシェニエのもっとも熱心な研究家ベック・ド・フーキエールや詩人の甥ガブリエル・ド・シェニエ²⁾の執拗な探究は、この「最初の刊行者」にたいして凱歌をあげているように思われる。

問題の「解説」については特に手きびしい。ベック・ド・フーキエールによれば、これは「相当あいまいであり、また、末尾の方では、真実が伝説に席をゆづっており」、要するに、編者は「世人の同情をひき、売らんかな」の意図に出で「成功した」のであった。ガブリエル・ド・シェニエにいたっては、これを「空想的解説」として一笑に附している。—— 実際、われわれから見ても、特にシェニエの「生涯」についてならば、一つならずの誤謬を指摘することができるであろう。(もともと、本稿の趣旨からしてわれわれはそれを一々指摘しなかつたが。)

①—*Poésies de André Chénier*, édition critique, étude sur la vie et les œuvres d'André Chénier, variantes, notes et commentaires, lexique et index, par L. Becq de Fouquières. — Paris, Charpentier, 1862. In-8°, XCI—465p. — B. N., Rés. Ye. 3714.

—*Oeuvres en prose de André Chénier*, nouvelle édition revue sur les textes originaux, précédée d'une étude sur la vie et les écrits politiques d'André Chénier et sur la conspiration de Saint-Lazare, accompagnée de notes historiques et d'un index, par L. Becq de Fouquières. — Paris, Charpentier, 1872. In-8°, CXX—408 p. —

B. N., Z. 45108.

② *Oeuvres poétiques de André Chénier*, avec une notice et des notes par M. Gabriel de Chénier. — Paris, A. Lemerre, 1874. 3 vol. in-12, portr. et facsimile. — B. N., Ye. 18335—18337.

その後もシェニエについての実証的、批評的研究は続行された。そして今世紀になって、その生涯と作品についての究明と校訂の作業は、ほとんど可能なかぎり果されたようだが、ここにおいて、新たに一八一九年の刊行者の努力が再評価されているのは興味ふかい。シェニエ批評の歴史を辿ったポール・グラシャンはいう。

「ラツーシュの解説は特に歴史的である。そこにはアンドレ・シェニエの生涯の主要な出来事が、かなりはつきりと、そしてあの時代としては賞讃すべき正確さをもつて語られている。……またこの刊行者が、同時に無名にして有名な¹⁾一人の青年詩人の草稿を闇の中から引出したことを陳弁している、極めてロマンティックな調子も注目すべきである。」

またシェニエの決定版といわれる『全集』を刊行したポール・ディモフは、一八一九年のラツーシュ版は「詩人の天才の真の啓示であつた」といつて、さらにラツーシュの改竄について弁護している。

「保存されている自筆原稿のテキストと一八一九年のそれとを比較対照すれば、ラツーシュが非常な慎重さをもつてアンドレの詩文を訂正したことを認めなければならない。二つのテキストの間に重要な相異が指摘されるとしても、それはせいぜい二十ほどである。従つて、アンリ・ド・ラツーシュは、結局、かれの仕事を果たしたそのやり方については、非難よりも讃辭に値すると思われる。²⁾」

実際、ラツーシュの、いわば添削は、当時、作品の美点よりも欠点に敏感だった旧慣墨守の批評家たちをおそれて、シェニエの作詩上のある種の大胆さ、新しさに「必要な……薄化粧³⁾」をほどこしたのであつて、「その用心は、一八一

九年においては、絶対に正当であつた⁴⁾ともいえよう。ただラツシーシュという人物が、もともと有名な韜晦趣味の持主であつただけに、信用がなかつたことは確かである。

- 1) Paul Glachant, *André Chénier, critique et critique*, Paris, Lemerre, 1902, P. 232.
- 2) Paul Dimoff, *Oeuvres complètes de André Chénier, Bucoliques*, Paris, Delagrave, 1943, p. xii.
- 3) *Idem*.
- 4) F. Segur, *H. de Latouche*, p. 93.

*

要するに、ラツシーシュの「一八一九年版」は、シェニエの伝記や作品についても、歴史的基点をなしていることを認めなければならぬ。けれども本稿におけるわれわれの関心の対象は、この種の考証的詮索ではない。

悲劇の青年詩人アンドレ・シェニエは、一八一九年八月、アンリ・ド・ラツシーシュの手によつてこの国の文学界に投じられた。すなわち、死後二十五年にして、かれは当代の若き文学改革者たちの同時代人として復活したのだ。そしてたちまちかれらの「長兄」として祭りあげられ、「近代派の首領」として大きな歴史的役割を果たしたのであつた。

この時、ラツシーシュによつて提示されたシェニエの姿が、虚像であろうとなかろうと、またその詩人としての解釈において錯覚や思い過しがあろうとなかろうと、これは大きな文学的影響であることに間違ひはない。そしてもしそこに刊行者自身の演出があつたとすれば、その効果はまさに莫大であつたといわねばならない。実際、シェニエについてのラツシーシュの役割は、しばしば『オシアン^{*}の詩』*Ossianic poems*の紹介者ジェイムズ・マックファーンソンのそれに比べられる。

* James Macpherson, *Fragments of Ancient Poetry Collected in the Highlands* (1760) ; *Fingal* (1762) ; *Tesmana* (1763)

さて、その後百数十年を経た今日、(もちろん最初の紹介者の魔法はつとに解けており)、詩人アンドレ・シェニエの精細な研究が続行された結果、シェニエとロマン派との影響関係は著しく軽視される傾向にある。たとえば、エミール・ファゲは「結局、シェニエはロマン派を魅惑したのであって、ちつとも鼓吹しはしなかつた」¹⁾という。またジュール・ヴァルテル氏は「何人もシェニエほど流派を作るのに適していなかつたものはない」といつているし、最近ではジャン・ファブル氏が「悲愴な伝説、詞華集の若干の詩篇、少数の既成概念、文学提要におけるクラシシズムとロマンテイズムとの間の位置、これが今日アンドレ・シェニエの運命だ」³⁾といっている。けれどもこうした論は、要するに、ながい距離をへだてた結果論であつて、われわれはこうした結果論の背後にシェニエとロマン派とのこの深い関係——この厳然たる事実を見失つてはならない。

第一次大戦終了の直後、フランス文学界では、アンドレ・シェニエの百年祭が異常な熱意をもつて行われた。それは詩人の生誕や死歿を記念してのものではない。実に一卷の書の出版百周年の記念なのだ。⁴⁾

このことは、疑いもなく、ラツィッシュ編『アンドレ・ド・シェニエ全集』(二八一九年)の歴史的意義の重大さを物語つてあまりあるといえるであろう。そして、あえてつけ加えるならば、これには編者ラツィッシュの「解説」が大いに与つて力あつたことを銘記しなければならないと思う。(完)

1) Emile Faguet, *André Chénier*, 1916.

- 2) Gérard Walter, *Oeuvres complètes* (Bibl. de la Pléiade), 1940.
- 3) Jean Fabre, *André Chénier, l'homme et l'œuvre*, Hatier-Boivin, 1955, p. 224.
- 4) 一九六二年にもシェニエ生誕二百周年祭が行われ、パリ大学をはじめ各所に記念講演会が開かれたほか、国立図書館では「アンドレ・シェニエ展」が催された。

後記

本稿では、特に「解説」の文中に註解を要する箇所が多々あるが、論考の趣旨からしてこれを省略した。ただ左の諸点を附記する。――

- * シェニエの古い版本で、その題名を原語表記したものには、パリ国立図書館(B.N.)の整理番号を附した。
 - * 「一八一九年版」はカルカソンヌ市立図書館にも一部収蔵されている。(Bibl. mun. Carassonne, Fonds Chénier.)
 - * シェニエ処刑の場所は *place de la Révolution* ではなく *place du Trône* である。シェニエは午後三時に押送車に乗り六時頃処刑された。「死の同伴者」は結局二十四人であった。
- なお、左の諸誌に収められた拙稿と重複するために註記を略した箇所もある。
- 一、文学研究 (三三、五〇、五一、五二、五五、五六)
 - 一、フランス文学研究 (一九五五年)

最後に、筆者の用いた「一八一九年版」の目次を左に転写するが、ページの記入などに脱漏のあることを許されたい。

TABĒ

DES MATĒRES.

	pages
Sur la vie et les ouvrages d'AndrĒ ChĒnier.	v
L'INVENTION, poĒme	1

IDYLLES

L'oaristys, imitĒ de la XII ^e Idylle de ThĒorite.	15
L'Aveugle.	
La LibertĒ.	
Le Malade.	
Le Mendiant.	
Mnazile et ChloĒ.	
LydĒ.	
Arcas et PalĒmon.	
Buechus.	
Euphrosine.	
Hylas. Au chevalier de Pange.	
NĒtre.	
Fragments.	
ĒPILOGUE.	

ÉLÉGIES.

I^{re}

II, tirée d'une Idylle de Bion.

III.

80

(p. 394) SUITE DES ÉLÉGIES.

IV.

V.

VI.

VII.

VIII.

IX.

X, au chevalier de Pange.

XI.

XII.

XIII, tirée d'une Idylle de Moschus.

XIV.

XV.

XVI.

XVII.

XVIII.

XIX.

XX. (Dans le goût ancien.)

XXI.

XXXII.
XXXIII.
XXXIV.
XXXV.
XXXVI.
XXXVII.
XXXVIII.
XXXIX.
XXX.
XXXI.
XXXII.
XXXIII.
XXXIV.
XXXV.

154

SUITE DES ÉLÉGIES.

(p. 395)
XXXXVI.
XXXXVII. (Imité d'Asclépiade.)
XXXXVIII.
XXXXIX.
XI, aux deux Frères Tyrdaine.
Fragmens.

156

157

167

ÉPÎTRES.

I^{re}, à M. Le Brun et au marquis de Brazais.

177

À M. CHÉNIER L'AÎNÉ (ANDRÉ), par Le Brun.

II.

185

III.

ODES

I^{re}, à Marie-Joseph de Chénier.

197

II.

III.

IV.

V, aux premiers fruits de mon verger.

203

VI.

VII.

VIII, à Fanny, malade.

IX, à Marie-Anne-Charlotte Corday.

210

X.

XI. La Jeune Captive.

216

POÉSIES DIVERSES.

Fragmens d'un poème intitulé HERMÈS.

219

Fragmens d'un poème sur l'Amérique.

Fragmens d'un poème sur l'Art d'aimer.

Hymne à la France.

Le Jeu de Paume, à Louis David, peintre.

243

(p. 396)

Sur un groupe de Jupiter et Europe.

260

A M. de Pange.	
Fable. (Horace, Satyre VI, livre II.)	
Sur la frivolité.	
Au bord du Rhône, le 7 juillet 1790.	
Lambe 1 ^{er} , sur les Suisses révoltés du régiment de Chateaufieux,	
fêtés à Paris sur une motion de Collot-d'Herbois.	267
Lambe II.	
Lambe III.	
Lambe IV. (Derniers vers de l'auteur.)	

MÉLANGES DE PROSE.

Avis aux Français sur leurs véritables intérêts.	275
Réflexions sur l'esprit de parti.	
Lettre de Marie-Joseph de Chénier.	
Écrit daté de Londres, dans une taverne.	
Les autels de la Peur.	
Premier chapitre d'un ouvrage sur la cause et les effets de la perfection et de la décadence des lettres.	
A sa Majesté Stanislas-Auguste, roi de Pologne, grand-duc de Lithuanie.	
A Guillaume-Thomas Raynal.	
De la cause des désordres qui troublent la France et arrêtent l'établissement de la Liberté.	
Aux auteurs du Journal de Paris.	

Lettre de Louis XVI aux députés à la Convention, rédigée
par André Chénier.

Fin de la Table des Matières.

390

ŒUVRES

COMPLÈTES

D'ANDRÉ DE CHÉNIER.

Après d'André Chénier avant que de descendre,
J'élèverai la tombe ou manquera sa cendre.
Mais on verra du moins et son doux souvenir
Et sa gloire et ses vers dictés pour l'éternel.

(S. J. DE CHÉNIER, *Disc. sur la Colonne*.)



PARIS.

À LA LIBRAIRIE CONSTITUTIONNELLE

DE BAUDOUIN FRÈRES,

RUE DE VAUGHAN, N° 35,

FOULON ET COMPAGNIE, LIBRAIRES,

RUE DES FRANCS-BOURGEOIS, N° 3.

1819.
L. 11